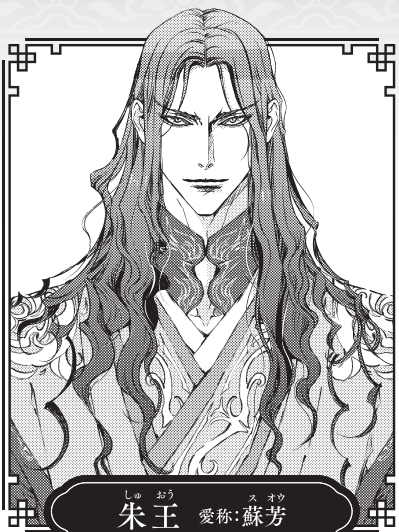
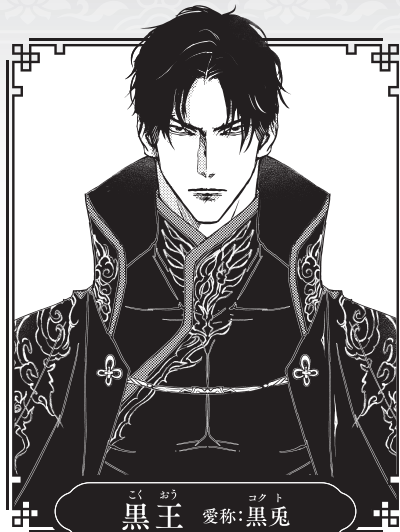


死んだはずのお師匠様は、
総愛に啼く2



しゅうおう ヌオウ
朱王 愛称: 蘇芳

翦燕の二番弟子で俺様な態度の軍人。
しかし翦燕のことは一番大事に想っており、
四天王の中では一番まともに仕事をしている。



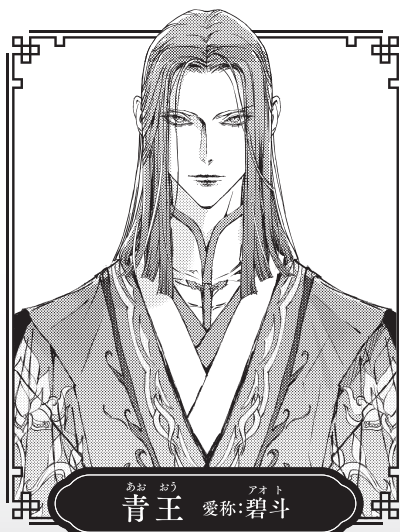
くろおう コクト
黒王 愛称: 黒兎

翦燕の一番弟子。寡黙で二言までしか喋らない。
感情の起伏が少ないが、翦燕には異常なほど
愛情を抱き、懐いている。



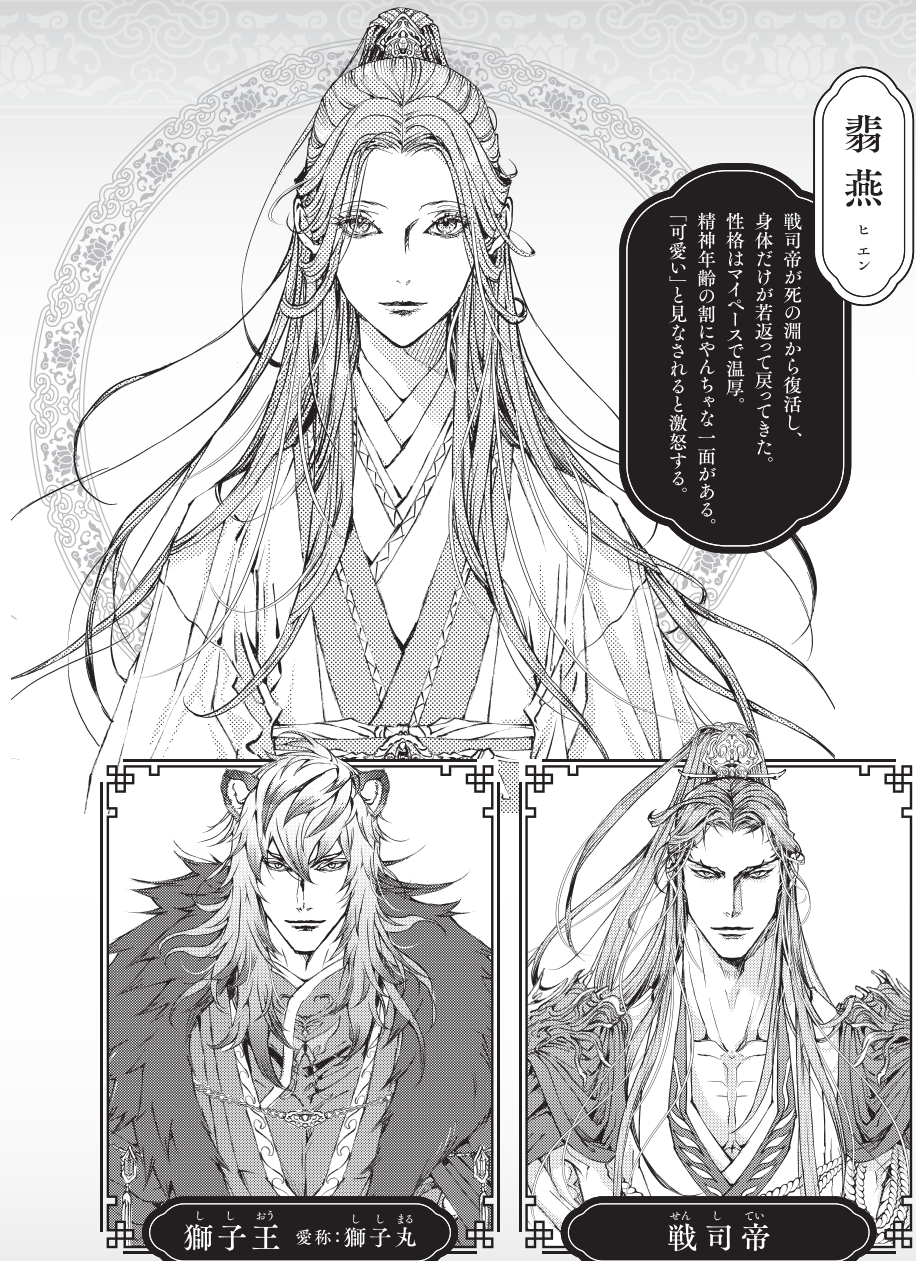
しろおう マシロ
白王 愛称: 真白

青王と同じく翦燕の三番弟子。
知的だが真面目過ぎるところがあり、
一度は任務のため翦燕を狙う。



あおおう アオト
青王 愛称: 碧斗

翦燕の三番弟子。四天王の中では
一番のお調子者で、チャライ性格。
外面はきりっとした美人外交官を演じる。



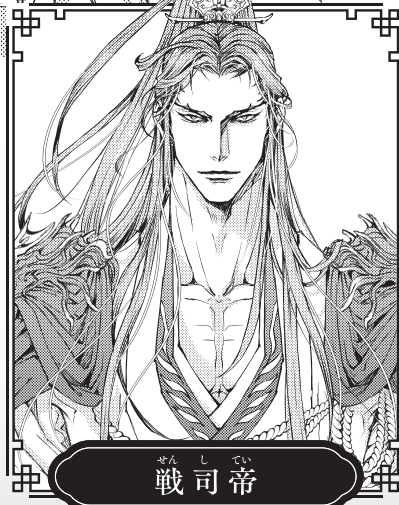
翦燕
ヒエン

戦司帝が死の淵から復活し、
身体だけが若返って戻ってきた。
性格はマイペースで温厚。
精神年齢の割にはやんちゃな一面がある。
「可愛い」と見なされると激怒する。



ししおう ししまる
獅子王 愛称: 獅子丸

若く可愛い姿で帰ってきた主(翦燕)に
振り回されればなしの優しい獣人。
常に翦燕の側について、はらはらしながら見守る。



せんし
戦司帝

三万年前、国の武神である四天王を率いて戦う。
禍人の呪いと相打ちし、戦死したと思われていた。
豪快で気取らない性格。

目次

死んだはずのお師匠様は、総愛に啼く2

7

番外編 溢れんばかりの色に溺れる

265

死んだはずのお師匠様は、
総愛に啼く2

序章 古き日の思い出

——四万年前、まだ戦司帝が健在の時代。皇宮にて。

その日、ユウラ皇宮内にある大光殿は歓声で溢れていた。

大門前には多くの民衆が集まり、皇宮に向けて口々に祝福の声を上げる。

「ユウラ国万歳！ 四天王様、お慶び申し上げます！」

「また我が国に、頼もしい武神が増えるぞ！」

ユウラは今、歴史的な瞬間を迎えている。

戦司帝の弟子である四人の公子が、武の王として冊封されるのだ。

翡翠は門前で民衆に紛れながら、にっと口角を上げる。

（おお。これは……予想以上の盛り上がりだな……）

弟子の晴れ舞台であるのに、彼らの師匠である翡翠は皇宮を出てお忍びで都の街へ降りていた。

ひとえに、民衆の反応を肌で感じたかったからだ。

一通り街を見回ったが、やはり大門前が一番盛り上がりつつあるようだ。

翡翠もここでお祭り騒ぎに加わりたいところであるが、そろそろ皇宮に戻らなければならない。

いずれユウラの武の柱となる四天王の誕生を、民衆は純粹に喜んでいる。

安堵と感動に胸を熱くさせながら、翡翠は皇宮の大門をくぐった。

冊封の儀はすでに終わり、そのまま宴へと移行している時間だろう。

翡翠は気配を消して大光殿に入り、末席の空いている席に座った。

大光殿は端から端まで見通せないほどに広く、玉座は殿内に設けられた九段の層の上にある。

そこに皇王と皇妃がいるはずだが、末席からではその姿はよく見えない。

同じく、段上にもいるであろう愛弟子たちの姿も細かいところは確認できなかった。

玉座から入口までは朱色の絨毯が敷かれ、その両脇に向かい合うようにして、三列ずつ酒席がずらつと並べられている。宴といえど警備は万全で、参列者の後ろには衛兵が並び静かに目を光らせていた。戦司帝の席は、おそらく玉座の近くに用意してあるだろう。

しかし翡翠がそこに座らず末席に座るのには理由があった。

宴の席に招かれているのは、高官や地方を治める領主らなど選り抜かれた権力者だけだ。翡翠は気配を周りと同調させ、彼らの話を傾ける。

「——これはユウラにとって大きな変化だ。四天王のうちの誰かが、戦司帝様に並ぶほどの力を付ければ、勢力が大きく傾くぞ」

「何を言う、戦司帝様に並べるものか。あのお方が皇子派である限り、次代は決まっているようなものだ」

「……そろそろ西におられる弐王様が、こちらへ帰ってくるという噂もあるぞ」

「なんと！ そうなれば、勢力図ががらりと変わるではないか……！ 四天王が弑王派になる可能性も……」

「いずれにせよ、勢力の動きを的確に読まねばならん。……どちらに付くべきか……」
手酌で酒を呷りながら、翡翠は小さくため息を吐く。

予想はしていたが、こちらの反応は民衆が抱いていたものと大きく違う。

四天王の誕生を純粹に喜ぶものはおらず、自身の身の振り方を考えている者たちばかりだ。

(……やっぱりこうなるか……。変化に乗じて弑王派が活性化するとすると、僕も動き方を考えないと……)

ユウラ民族は、はるか昔から抱えている問題があった。

他の人間族に比べ、出生率が大幅に低いのだ。

長命であるという特徴のためとも言われているが、原因はいまだに分かっていない。

皇家も例に漏れず、跡継ぎに恵まれにくかった。

そのためユウラの王座を継ぐ者は皇王の実子が第一候補とされるものの、『皇家に籍を置く者』であれば誰にでも機会が与えられている。

「——皇子殿下がああでなければ、こうも拗れることはなかったんだが……」

「王位継承者が定まらねば、陛下も落ち着かないであろう」

官僚たちは遠くにある玉座を見据えながら、熱い議論を交わす。

ユウラ国の王座は生前讓位されることがほとんどだ。

皇族は特に長命なため、崩御後の王位継承だと一代の王が長く統治を続けることになってしまう。それでは国の発展を妨げてしまうと危惧したユウラの最初の皇王は、実子が成人すると自ら王座を退いた。力を残したまま王座を退き、上皇として次の王を支えていくという道を選んだのだ。それがいつしかユウラの伝統となり、王位継承の神聖な儀式である『天証の儀』と共に永く守られてきた。

しかし現皇王の息子である炉柎は生まれながらに病弱で、気質も王の器ではない。

そのため皇子が幼い頃から王座を巡る争いが拗れはじめ、かつてないほど泥沼化してしまっている。

かつては皇王の弟である弑王が、次の王座につくべきと言われていた時期もあった。

人望も厚く、王としての器も申し分なかったからだ。

妃を迎えていない彼の跡継ぎに期待を持つ者も多かった。

(……弑王様だけじゃない。あの頃は各地に派閥ができて、水面下で争いを繰り広げていた。……ああ、くそ。最近は落ち着いてきたと思っていたんだが……)

愛弟子が四天王に冊封されたのは喜ばしい。

しかし彼らを王座争いに巻き込むのだけは絶対に避けたい。

翡翠はぐしゃぐしゃと髪を掻き回し、杯に酒を注ぐ。

すると上座からよく通る声が響いてきた。

「酒が進んでいないようだな、四天王。どうした？」

皇王の声だ。穏やかで、それでいて堂々とした皇王の声は、広いこの大光殿でも隅々にまで行きわたる。口調からはご機嫌であると窺えた。新たな王を迎えた皇王は純粋に喜んでいるようだ。

少し救われた気がして、翡燕は頬を緩ませた。

少しの間、四天王全員が口を揃えて言い放つ。

「申し訳ありません。二杯目の盃は、師に捧げようと決めております」

「なるほど、戦司帝だな？」

「その通りでございます」

「……つぶ」

酒を噴き出しそうになり、翡燕は慌てて袖で口元を拭った。

段上を仰ぎ見たが、やはり遠すぎて四天王の杯の様子など見えない。

会話が事実ならば、四天王は乾杯から酒を飲んでいないことになる。

（……何を律儀なことを。柄でもない！）

戦司帝と四天王との師弟関係は、一般的な堅苦しいものとはほど遠い。

翡燕の大雑把な性格では、彼らを厳格に育てることなど到底できなかつたからだ。

四天王とは寝食を共にして、師弟というよりも家族のような付き合いだ。

そんな彼らがこんな風に、いかにも弟子らしい真似をするとは思ってもみなかつた。

皇王が笑い声を交じらせながら、言葉を続ける。

「つははは、まったく。お前たちの師はこんな時も自由だな。まさか愛弟子の冊封の儀に出ない

とは！」

「はい。師匠の人柄は分かっていたつもりでしたが……。我らも驚きました」

四天王からも笑い声が漏れ、宴の場がわいわいと和やかになる。

しかしそれを打ち消すように、ユウラの宰相が剣呑な様子で立ち上がった。

鋭い眼に、癖のある黒い髪。眉間に刻まれた皺は、どんな時も緩んだりはしない。切り裂くような雰囲気纏う彼こそ、この国の宰相である俱旦だ。

「陛下！ どうか発言をお許しください」

「宰相か。……許そう」

「恐れながら、さすがに今回ばかりは目に余ります。戦司帝という立場でありながら、国の重要な

儀に出席しないとは……あまりに身勝手な傲慢ではありませんか？」

宰相の言葉に、穏やかな空気は一変した。

中には同意するように頷く者もあり、ざわざわと不穏なざわめきが広がる。

翡燕は料理に箸をつけつつ、呆れながら宰相の様子を窺った。

（……ははっ。『戦司帝という立場でありながら』？ よく言っよ……）

『戦司帝』とは現皇王が新たに作り出した役職だ。ユウラが持つ武力機関の総元締めでもあり、国

一番の強者に与えられる称号のようなものもある。

しかしながらこの戦司帝という立場は、強大な権力を保持しているようで、そうでもない。最終

的な軍事の決定権は皇王にあり、戦司帝はあくまで助言や指揮を担うだけだ。

かつてはこの助言を宰相が行ってきた。指揮は各機関である軍や部隊の長が行うことで、ユウラの軍事部は滞りなく回っていたのだ。

だからこそ宰相はこの新設された役職が気に入らない。戦司帝がどれだけ不要なものであるのか、彼は常に示そうとしてきた。

その敵意はもちろん、翡燕個人にも向けられる。

鷹揚な翡燕は『責任感がない』、『上に立つ者の器ではない』と詰り、万が一にも戦司帝という位が宰相を超えないようにしている。

（普段は戦司帝という位をこき下ろしているくせに、こんな時に限って立場うんぬんグチグチと……。まあ、いつも通りだが……。さて、次は誰だ？）

「こればかりは、宰相閣下の仰る通りでしょう！ 愛弟子の晴れ舞台すら見届けようとしなないなど、無責任が過ぎますな！」

「いくら武芸に優れていても、素行が悪すぎます！」

宰相に同意を示したのは実際に行政を執行する役割を担う尚書省の長とその補佐官だ。彼らは宰相と繋がりが深く、皇子派で有名である。

翡燕にとつてみればこれも予想通りの反応だ。いつも通りすぎて笑えてくる。

状況を窺いながら酒を呷っていると、今度は鈴が転がるような笑い声が響いた。

「まあまあ、皆さま。お祝いの席なのですから、あまりお怒りにならないように。……戦司帝は昔っから、堅苦しい行事が苦手でしたものね」

「皇妃殿下！ 殿下がそのようにお優しいから、戦司帝が傲慢になるのです！」

「まあ怖い。宰相からお叱りを受けたわ」

皇妃は宰相の声にも臆することなく、くすくすとまた笑い出した。

不穏だった場が、その穏やかな笑い声によって少しずつ和んでいく。

声の主は皇王の三番目の妃であり、第一皇子の実母でもある鈴蓮妃だ。

皇后は長く病に臥しており、今は鈴蓮妃が皇后の代理として国の行事に参加する機会が多い。

もしも皇后が崩御した場合、次の皇后は彼女で間違いないだろう。

鈴蓮妃は気立てもよく、穏やかで優しい女性だ。

皇妃となり数万年が経ったが、皇王とはいまだに仲睦まじく過ごしている。

民衆からも女神だと尊敬され、まさに理想の皇妃だと言えるだろう。

皇妃につられ、皇王からも再び笑い声が漏れた。

「妃の言う通りだ。戦司帝は自身の冊封の儀でも居眠りしていたぐらいだからな。とはいえ、今回も宴ぐらい参列してくれると思っていたが……。うむ、後ほど叱っておくことにしよう」

「あっ！ それは困ります！」

翡燕は慌てた態度を装いながら、その場で立ち上がった。

王座に向けて拱手すると、この場に戦司帝がいるとは思わなかった官僚たちが、ぎよつとした顔でこちらを振り返る。

翡燕はその場で地味な外套を脱いで、殿の中央部まで進み出た。

そして幞頭と簪を取って、薄水色の髪をさらりと垂らす。

『いつもの戦司帝』の姿となった翡翠は、改めて王座へ向けて頭を下げた。

「陛下、謹んで拝謁を賜ります。この戦司帝、御覧の通り宴には参列しております」

目線だけ上げると、眉間の皺を深くした宰相が目に入る。

尚書省の面々はこちらを見て驚愕の表情を浮かべていた。

遠くに見える皇王が、こちらを窺うように少しだけ腰を浮かせる。

「戦司帝……？ どうしてそんな末席にいたのだ？ 近くへ寄りなさい」

「はい、陛下」

王座の下まで進み出ると、層の上にいる者たちの姿がやっと見えた。

一番高い九段目の層の真ん中には皇王と皇妃が、その下の層の両脇には一つずつ席が設けられ、左側に第一皇子が座っていた。

その下の層には四天王となった愛弟子が、二人ずつ左右に分かれて座っている。

(……そしてその二段下の層に、宰相か……。こりゃ、へそ曲げるのも無理ないか……)

この配置からすれば、層の上にいる者の中で一番の格下が宰相になってしまう。宰相の機嫌が悪かったことも納得できた。

苦笑をこらえていると、上から呆れたような声が降りてくる。

「まったく、お前の席があんな末端なはずないだろう？」

王座を見上げれば、こちらを穏やかに見つめる皇王と目が合った。

在位して長い、彼の美しさはまだまだ衰えない。

強い意志を感じさせる整った眉と、漆黒のまつ毛に縁どられた切れ長の瞳。濡れ羽色の髪はひと筋も乱れることなく、皇王としての風格を際立たせている。

皇王は翡翠にとつて父親も同然だ。

いつものように微笑みを向けると、八層目にいた皇子が立ち上がった。

彼は満面の笑みを浮かべ、まるで子どものように向かいの酒席を指さした。

「戦司帝、やっと来てくれた！ 席はこっち！」

「皇子殿下に御挨拶を。……なんと、そちらでしたか。ああ、皇妃殿下にも御挨拶を……」

「いいから！ 早く上がってきて！」

早く早くと手招きをする皇子は、もう三万歳を迎えている。

ユウラの民には成長がゆっくりな者もいるが、さすがにもう立派な大人だ。しかし第一皇子炉柎は、いまだに言動が幼い。

(……それにしても……。あちゃ、僕の席は皇子と同じ層か……。これは殿下が我儘を言ったに違いないな)

戦司帝の席は下から八層目、皇子と対を成す席だった。おそらく皇子が望んで、皇王と皇妃がそれを叶えたのだろう。

層を上る前に、翡翠は宰相へと拱手する。

軽い挨拶のつもりだったが、予想通りというべきか苦言が返ってきた。

「どうして儀式に出席されなかったのです？」

「……皇妃殿下の仰っていた通りですよ。僕は堅苦しい行事は苦手なのです」
笑顔のまま肩を竦めてみせ、翡燕は歩を進める。

するとまたざわざわと、宰相派の官僚たちが騒ぎ始めた。

「聞きましたか!? なんと自分勝手な……!」

「やはり強さだけの男に、戦司帝という位は務まらないのでは？」

「もしかして、妬んでいるのかもしれないぞ？ 愛弟子が王になったことを……」

自分に向けられる非難の言葉を聞きながら、翡燕は四天王の顔を見上げた。

彼らは声を上げる官僚たちの方を見据え、額に見事な青筋を立てている。溢れそうな殺気を抑えているのがよく分かった。

師を愚弄されれば、激怒するのは当然。

しかしそれでも四天王が反論しないでいるのは、これから国の中枢に立つ彼らに、翡燕が口を酸っぱくして言い聞かせていたからだ。

『———いいかい？ この国で僕は、いわば防風林みたいなものなんだ。風を受けても適度に受け流すに限る。だから僕が笑顔でいる時は、お前たちも笑顔でいる。僕が怒る時だけ、一緒に怒ってくれ』

何度も言い聞かせたこの言葉を、彼らは王になった初日からちゃんと守ってくれたようだ。
ほっと吐息をつき、思わず笑みが漏れる。

今日は愛弟子の記念すべき日だ。

この日を一番待ち望んでいたのは自分だと、自信を持って言える。

翡燕は大股で層を駆け上がり、四天王の前に立つ。そして喜びを爆発させた。

「おめでとう！ 心の底から誇りに思うよ！」

翡燕は右端に座っていた青王をぎゅっと抱擁し、そこから順々に四天王全員を抱きしめた。

一人一人の杯に酒を注ぎ、持参していた自分の杯にも酒を注ぐ。

そして皇王を見上げて、翡燕は盃を掲げた。

「では四天王の二杯目の乾杯は、僕が奪わせていただきます！ はい、乾杯！」

笑顔で酒を飲み干すと、ばかりと口を開けたままの四天王が目に入った。

公式な場に初めて出た彼らは、こんな場でも翡燕が信じられないほど『いつも通り』なことに驚いているのだろう。

翡燕はまた酒を注ぎ、今度は官僚らの方を振り返った。そして目いっぱい高く杯を掲げる。

豪快に飲み干せば、同調した官僚らが次々に立ち上がった。

気付けば大殿にいたほとんどの者が立ち上がり、四天王と戦司帝への祝いの言葉と共に、酒を叩いていく。

「まったく、戦司帝様！ 儀式に出ておられないから、こちらがハラハラしましたぞ！ おめでとうございます！」

「戦司帝様、そして四天王様！ これからもユウラの守護神として、この国をお守りください！」

「陛下！ 後ほど戦司帝様をお叱りになることをお忘れなきよう！」

笑い声が光光殿に満ちて、不穏な場が砕けた祝いの宴へと変わっていく。

層の下から掛けられる言葉に、翡燕は一つ一つ笑顔で応えた。

宰相派は相変わらず刺々しい視線を送ってくるが、見て見ぬふりを決め込む。

『戦司帝』を表す言葉は、いいものも悪いものもたくさんあった。

武神、王の守護神、痴れ者や、道化師。

それらの言葉に流されず、時に同調し、翡燕は『戦司帝』を演じてきた。

ひとえに、守るべきものがあつたからだ。そしてそれはこれからもっと増える。

声を立てて笑いながら、翡燕は四天王を振り返った。

「いやあ、冊封の儀に出なくてすまなかつた！ だけどどうしてもこれを渡したくて」

翡燕は懐を探り、四つの包みを引っ張り出す。

王座から降りてきた皇王が、翡燕の手の中にある包みを興味深げに覗き込んだ。

「それは何だい？」

「陛下、慶玉佩（腰に帯びる礼服の装飾品）をご存じですか？ 国の大きな慶事の際に数量限定

で作られるものです。都で手に入るのは腕のいい細工師が作るものだと思品なので、並ば

ないと買えないんですよ」

「まさか戦司帝は、それを買いに？」

「ええ、そうです」

あつさりと言いつけると、皇王までもが驚きの顔を浮かべた。

そのままちらりと宰相の方を窺うものだから、翡燕はくすりと笑みを漏らす。

自ら都に赴かずとも、誰かしら遣いを出せばいいと翡燕も分かっている。この件で非難されることも承知の上だ。

「……僕は、都の熱を肌で感じたかったです。この玉佩からは、四天王の誕生を祝う民意が感じられます。そして期待も」

「そこまで言うと、翡燕は皇王に向けて小声で囁いた。

「陛下、奥の方に一步ほどお下がってください」

「え？ こうかい？」

皇王が一步引くと、翡燕はその場に跪いた。

四天王も立ち上がり、翡燕に倣って並んで皇王へと跪く。

そして翡燕は、今日一番の声を張り上げた。

「我らの力は、君主と国民のためだけにありますもの！ この国の剣と成り代わり、守護のために力を尽くすことをここに誓います！」

言い終わると、翡燕は激しい音を立てて両の拳を地面へ叩きつける。そのまま叩頭すると、殿がしんと静まり返った。

しばらくの間の後、静寂が割れんばかりの歓声に満ちる。

戦司帝や四天王、そして皇王を讃える言葉を聞きながら、翡燕はゆっくりと息を吐く。

この誓いは、『戦司帝と四天王は国を守ることだけに尽くす』というものだ。そして誓いの奥には、『他の争いには与しない』という意が込められている。

ここに来ている官僚らは、その意味を理解するだろう。王位継承には関与しないと、公の場で明言したも同然なのだから。

しかし理解するのは違う。

こちらがこうして明確に意思を示しても、泥沼に引き込まうとする輩は確実にいる。その確たる証拠が、翡燕の舌に残っていた。

その日の夕方、翡燕はいつものように薬師室を訪れた。

そこにはいつもの顔ぶれが揃い、翡燕へと笑顔を向ける。

「戦司帝様！ 本日もいらっしやったのですね！」

「ああ。皇子殿下が随分お飲みになっていたので、明日の酔い覚ましでもと思ったが……」

「今すぐお作りいたします」

「いや、僕が調査しよう。この間見つけた強壯薬の調査も試してみたい」

翡燕が言うと、医官は何の疑いも持たず中へと案内してくれた。

治療院の中にある薬師室は、本来ならば医官とそれを補助する薬師しか入れない。

医官ではない翡燕が自由に行き来できるのは、単に皇王から許可が降りているからだけではない。皇子派である彼らとの関係を常に友好に保ってきたからだ。

「戦司帝様が調査してくれたとなれば、殿下もお喜びになりますね。あなた様とお会いになった日の殿下はとても機嫌がいいですから、我々も助かります」

「それはよかった。ない頭を駆使して、薬学を学んだ甲斐があつた」

「つはは、御冗談を！ 一度お教えすればすぐに習得されるというのに、何を仰います！」

翡燕が薬学について学び始めたのは、病弱な皇子のためということになっている。

初めのうちは部外者である翡燕を警戒し、許可があつても入れてもらえなかつた。

しかし翡燕は根気強く治療院を訪問し、熱心に薬学へと打ち込んだのだ。医官たちに熱意を認められ、調査作業を任されるまで諦めなかつた。

今ではすっかり信用され、一日中薬師室に籠こもっていても文句ひとつ言われない。

「強壯薬の調査が上手くいけば、それも服用していただくと思つている。甘みを増したものを作るから、いつものように毒見は任せただぞ？」

「あなた様の腕は信用しておりますよ」

医官は笑つて拱手したあと、自身の業務へと戻つていった。

翡燕は上衣をたすき掛けしながら、こちらを監視している視線がないことを確認する。そして薬棚から強壯薬と解毒薬の材料を取り出していった。

薬研やぐらが置いてある卓へと移り、翡燕は懐から書物を引つ張り出す。強壯薬の調合法が記されている書物と、そしてもう一つ。

皇家に伝わる毒薬、『泉丸せんがん』の調合法が書いてある書物だ。

翡翠はそれを強壯薬の書と重ねて広げ、自身の手帳を隣に置く。
(さて、もう一度だ。……この泉丸に効く、確かなものを作らなければ……)

泉丸という毒は薬師には有名なものだ。解毒薬を示した書は一般にも出回っており、誰でもその情報を得られる。

しかし皇家が使う泉丸は、『泉丸』という名前を隠れ蓑にしたまったく別の毒だ。

毒自体の成分も作用も同じように見えるが、一般に流通している解毒薬では完璧に解毒できない。

翡翠が薬師室に入り浸るのは、まさに泉丸の解毒薬を作るためだった。

皇子のために薬を作る振りをして、泉丸の解毒方法を探っていたのだ。

怪しまれないよう長い年月を掛けて少しずつ進め、やっと完成間近まで漕ぎ着けた。

(……明日からは何かと忙しい。今日で仕上げなければ、次はいつここを使えるか分からない……)

調査法を手帳へと書き写しているところで、翡翠は誰かの気配に気付く。ぱっと顔を上げたと同時に、薬師室にいた全員が跪いた。

入口に立っている予想外の人物に、翡翠は驚愕に目を見開いた。

「……へ、陛下……」

「ここにいたか、戦司帝」

「な、何をしていますか！ どうしてここへ……!」

翡翠は慌てて泉丸の書物を懐に突っ込み、皇王へと駆け寄った。

そしてきよろきよろと周囲を見回し、眉根を引き絞って抗議の声を上げる。

「また護衛もつけずにお一人で！ 危ないと申したでしょう!」

「なに、護衛などいらん。お前がいつでも駆けつけてくれるだろう?」

「僕が近くにいるとは限らないでしょう! 初手に間に合わなければ、どうするおつもりですか!」

たすき掛けを解きながら、翡翠は大げさに溜息を吐く。

言わずもがな、皇王は『護衛はいらない』などと我儘を言える身分ではない。拒否しても必ず誰

かが側に付く。

それなのに一人も護衛が見当たらないということは、皇王は護衛を撒いてここへ来ているのだ。

皇王の護衛に就く者は、皇家護衛軍に属している精鋭である。

彼らを出し抜くには相当な技量が必要だというのに、彼は息をするように撒いてきてしまう。

「まったく、陛下には驚かされます。護衛らが可哀そうでしょう?」

「私もまだ現役だろう? いや、それより……」

皇王の腕が伸び、肩を抱き寄せられる。

体格は翡翠の方が逞しいが、背丈はそう変わらない。

親し気に肩を組みながら、皇王は翡翠へ向けて囁く。

『堅苦しいぞ、翡翠。どうして親父殿と呼んでくれないんだ?』

『あつ! 人前で翡翠と呼ぶのは控えてくださいって申したでしょう! このように親し気に接す

るのもよくないとあれほど……』

『いいじゃないか。お前も私の大事な息子だ』

肩に回したのと逆の手で、わしわしと頭を撫でられる。

皇王はこうした身体的な交流が多い性質で、愛情を身体全体からだで示してくる人だ。

翡翠は長い年月皇王と接し、今では自身もこの性質に似てきてしまったとさえ感じる。

『……親父殿……。さては酔ってますね？』

こそりと言うと皇王は口端を釣り上げて笑った。宴が相当盛り上がったのか、機嫌もよさそうだ。

翡翠は一つ溜息を吐き、跪く薬師たちへと口を開く。

陛下は酔い覚ましを御所望のようだ。後ほど結蘭宮ゆうらんぐうへ届けるように」

翡翠は薬師たちの返事を確認し、皇王を連れて薬師室を出た。

治療院から本宮へと繋がる回廊は、庭を一望できる造りとなっている。

皇王はぐつと伸びをして、翡翠へと穏やかな笑みを向けた。

「はあ、いい空気だ。翡翠と散歩なんて、いつ振りかな？」

「そう昔ではないでしょうか？」

「いや、先ほど気付いたが……また大きくなった気がするな。まだまだ成長期か？」

「まさか」

笑って言うも、皇王は翡翠の姿を、何かを確かめるように上から下へと眺める。

そしてその視線が、胸元で止まった。

「……して、翡翠。今日は薬師室で何を？」

「はい。薬の研究をしております」

「薬というと……もしやその書物に関するものか？」

「……」

言葉を詰まらせ、翡翠は自身の胸元に手を当てた。

恐らく皇王は、先ほど翡翠が慌てて書物を懐に隠したところを見ていたのだろう。

ユウラの皇族は穏やかでおっとりとした性質の者が多いが、時にこうして驚くほどの鋭さを發揮する。観念した翡翠は、懐から書物を取り出した。

それを見た皇王が「やはり」と頷く。

「うちに伝わる泉丸の書だったか」

「はい。……この泉丸に効く、正式な解毒薬を作ろうと思っています。皇家の泉丸は皇族の一部にしか伝わっておりませんが、こうして書物が残っている限り、悪用されるかもしれません」

「なるほどな。……しかしわざわざ、泉丸なんて使う者がいるだろうか？」

「そうですね……」

翡翠は肯定するように一つ頷いて、書物をパラパラとめくってみせた。

泉丸は皇宮で作られた暗殺用の毒薬だが、失敗作とされている。毒性が弱く、服用しても標的はすぐに死ぬことはないからだ。

しかし即効性はあるため、標的が女性や子どもだった場合、体調を崩して毒が使われたとそのままではばれてしまう。

一撃必殺の毒でもなく、遅効性を活かして時間差で命を奪うこともできない。

まさに暗殺には不向きな毒薬なのだ。

しかしその性質こそ、使い方によっては大きな脅威となる。

「確かに泉丸の毒性はあまり強くありません。屈強な武人ともなれば、摂取しても気が付かない。だからこそ、武人にとっては厄介な毒となるでしょう」

「……強い者であるからこそその危険性があるという意味か？ 長い期間知らずに摂取してしまえば……何らかの影響があるということか」

「ええ、そうです。まあ、武人相手に毎日定期的に摂取させるのは難しいでしょうが……」
毒を盛る手段はいくらでもある。

しかし標的の近くに潜ひそんで、怪しまれずに毒を盛り続けるには相当な技術がいるだろう。

毒の量も正確に調整しなければ、相手が毒の耐性を作ってしまう可能性もある。

それでも警戒しないままではあまりに危険だ。

「たとえばですが……四天王ほどの力を持つ者を害するならば、身体の不調が出ない程度までに毒の量を抑え、微量な毒を全身に行き渡らせる方法を取るでしょうね。身体は壊しませんが、武人としての成長はぐんと下がるでしょう。……そして一番恐ろしいのが、この泉丸の解毒剤がもう既にあることです」

「一般的に知られているものか？」

「そうです。その解毒薬では、皇家に伝わる泉丸の解毒はできません。半端に解毒されたままになります」

元々皇宮で作られた泉丸が、二種類あると知る者は皇族の中でもごく一部だろう。

ただでさえ失敗作の毒だから、記憶に留めている者はもつと少なくなる。

悪意を持った者たちからすれば、この上なく都合のいい状況だ。

「……使いようによっては、泉丸は恐ろしい毒です。……正確な解毒薬を作っておいて損はないと思います」

「……しかし毒を盛られたと気が付かねば、解毒薬を使うことも思い浮かぶまい」

「そこはご安心を。僕は泉丸の見分けがつかますので、匂いを感じたらすぐ対処しますよ。皇家の泉丸が使われるとしたら、皇宮こくか離宮りくでしようしね」

翡翠は書を畳んで、懐の奥にしまい込む。

「……そう。だから早く完成させなければ……」

皇王を送り届けたあとは、また薬師室へ戻って作業を続けなければならない。上手くいけば、今日中に解毒薬が完成する。

今日の宴では早くも、四天王に出されていた酒から泉丸の匂いがした。

試しのつもりだったのか、ごく微量だったが、確実に混入されていたのだ。

皇宮で力をつけようとする彼らを、誰かが害そうとしている。

「……僕ができることは全てやっておこう。……まずは解毒薬を最優先に、それから……」

悶々もんもんと思考を巡らせながら翡翠は顔を上げる。

すると、ずつとこちらを見据えていたのか、皇王と目が合った。

その目は真剣そのもので、先ほどまでの軽い調子が消え去っている。

深刻ともいえる表情に翡燕は戸惑った。

皇王はこちらへと寄り、まるで縋るように翡燕の袖を掴んだ。

「それなら……それならお前はどうかなる？ 戦司帝ほどの強さなら、泉丸を使っても影響はないに等しかろう。自分自身に盛られた場合は五感が鈍り、感知もできまい？」

(……ああ、なんだ。僕を心配してくれたのか……)

皇王は翡燕が皇宮に来てから、本当の親のように接してくれた。

大きくなった今でもその扱いは変わらない。拾われただけでも幸運であったというのに、既に返

せないほどの恩も愛情ももらっている。

しかし翡燕はあくまで拾われ子だ。

その立場だけは忘れてはならない。

皇王には実の息子である皇子がいる。ただでさえ床に臥せる時間の長い彼を、皇王はいつも心配していた。些事せじでむやみに心労を掛けたくはない。

「へ、陛下、大丈夫です！ その点でしたらご心配には及びません。僕は泉丸への耐性があるので、盛られたとて……」

そこまで話して、翡燕ははつと言葉を切った。

自身の失言を悟って、どくりと心臓が縮む。

目の前の皇王の表情が険しくなり、袖を握る力は逃さないとばかりに強くなった。

翡燕は慌てて廊下の先へと視線を移し、話を切り替える。

「陛下、皇妃殿下がお待ちなのでは？ 参りましょうか」

踵かかとを返して歩を進めようとしたが、やはり皇王は動かなかった。

袖を掴まれたままでは翡燕も動けない。

翡燕を見据える視線に、咎とがめるようなものが含まれている。

皇王がこんな目をしていると逃げるなどできない。きつと自身が納得するまで離してはくれないだろう。

観念した翡燕は目を伏せて皇王と向き合った。

するとすぐに問いが飛んでくる。

「……いつ盛られた？ ……誰にだ？」

「……さあ、分かりません。知らぬうちに耐性が付いておりました」

「まさか、あの後か……？」

「……っ」

翡燕は無意識にごくりと喉のどを動かした。

いつものように笑おうとしても、頬が引き攣つってしまふ。

(……っほんとに、こんな時に限って……鋭いなあ……)

へらへらしてのらりくらりと躲かす。そんな誤魔化ごまかしがこの状況で通じる訳がない。

分かっているのにそうしてしまうのは、長年染み付いた癖のようなものだ。

そんな翡翠の様子を見てか、皇王はまるで痛みに耐えているかのように顔を歪める。

「翡翠……なぜだ。どうして私に言わなかった？ 敏いお前なら、気が付いていたのだろう？ 毒を盛られていることも、誰の仕業かも」

「……いいえ。毒を盛られていたかどうかとも気付いておりませんでした。僕が鈍感なのは、親父殿もご存じでしょう？」

肩を竦めながら言うのと、皇王が悔し気に鼻梁びりょうに皺を寄せる。

まるで『全て自分のせいだ』と悔やんでいる表情だ。

かつて翡翠が弑王に犯され床に臥せていた時も、皇王はいつもこんな表情を浮かべていた。それを見る度に翡翠は泣きたくなかった。

どんな行為にも耐えてきたのは、二度と皇王にあんな顔をさせたくないと思っていたからだというのに。

「僕はこうして、元気にやっつてるじゃありませんか。何もありませんよ」

「……翡翠……。もしや、そうやってずっと……」

「なんの話でしょうか？」

「……っ！ どうしてそんなに、自分を殺してしまうんだ、翡翠！」

叱るように、懇願するように、皇王が叫ぶ。

しかし翡翠はやはり、ただただ微笑むことしかできなかった。

第一章 解毒と覚醒

意識がゆらゆらと浮上してくる。

翡翠は目を閉じたまま、手のひらで自身の周りをばたばたと触った。

手の感触からして、ここは居間の寝椅子だ。いつの間にか眠り込んでいたらしい。

(……それにしても、皇宮にいた頃の夢か。……懐かしい。こんな状況だからか……)

結局あれ以来、四天王に毒を使われることはなかった。

本当に試しのつもりだったのか、はたまた他の理由があったのか、今では分からないはまだ。

重く溜息を吐いて、翡翠は瞼まぶたを開いた。

目を負傷してから数日。いまだに皇子からの接触はない。

翡翠はひたすら身体の回復に専念したが、目は一向によくなくなる気配はなかった。

包帯の下で瞼を開いてみても、僅かな光すらも拾えない。

衰弱していた身体は少しずつ回復しつつあるが、目の症状は毒を受けた時からあまり変わっていないなかった。

翡翠は寝椅子に凭もたれ、小さくため息を漏らす。

(……やはり、解毒薬があまり効いていないか……。……くそ、耐性くらいは残っていてほしかった)

たな……)

このまま安静に過ごしていればいつかは改善していくのかもしれない。しかし気は焦る一方だ。表立つての動きはないが、皇子側がこのまま何もせず終わらせるとは考えられない。

(……何か……何でもいい、できることはないか？ ……今でも、僕が動けるとすれば……)

「……翡燕。あかんで」

隣から声が聞こえ、肩をぎゅっと抱き寄せられる。

いつの間にか隣に朱王しゅうおうがいたことに、翡燕ははっと息を呑んだ。

顔を声の方へ向けると、頬を優しく包み込まれた。

「あんまりいろいろ考え込むな。今は身体を治すことだけに専念せえ」

「……お前、いつの間に僕の隣に……」

「ちよっと前からおったで？ お前が居間でばーっとしたあと、舟漕いで終しまいには寝こけんの、

ずうっと横で見てたわ」

「……声かけるよ。ったく」

朱王らは相変わらず、この屋敷に交代で泊まりに来る。

最近では青王や白王はくおうも屋敷を訪れることもあり、ますます翡燕の周りは騒がしくなってきた。

「別に考え込んでなんかない」

「嘘つけ。お見通しやねん、こっちは」

「そんなこと……」

抗議するように眉根を寄せると、そこを宥なだめるように撫でられる。

その手つきが優しくて、二の句は継げなくなってしまった。

朱王の顔は見えないが、声色や雰囲気はこちらを心配していることが痛いほど伝わってくる。

(……ごめんな、蘇芳すおう……みんなも……)

以前の強い自分であれば、こんな状況なんて笑い飛ばしてすぐに打開できただろう。彼らを巻き

込む必要などなかった。

歯痒はがゆく情けないが、弱い自分がまた考えなしに動けば彼らに更なる心配を掛けてしまう。

翡燕は小さく息を吐き、そのまま身体の力を抜いた。

朱王の大きな胸に凭れると、彼から安堵したような吐息が降ってくる。

「まだ怠だるいんやろ？ 寝えや。寝台には運んだるから」

「……ん」

ゆるく返事をしたところで、中庭の方から屋敷の家令であるソヨの焦った声が聞こえてきた。来客の対応をしているようだが、いつもと様子が違うようだ。

朱王もそれに気付き、翡燕を寝椅子に残したまま立ち上がった。

「翡燕はここにおれ。様子を見てくる」

「うん」

翡燕が皇子に囚われ、毒を盛られて目を負傷してから、この屋敷は門を閉ざしている。全ての来客を断っており、用件は朗々ろうろう荘さうが受けることになっていった。

耳を聳ててみると、聞き覚えのある声が聞こえてくる。

「———— 翡燕に会わせてくれ。顔を見るだけでいい」

(……っ、まさか…… 弑王様……?)

声の主の正体に気付き、翡燕は腰を上げた。

卓に手をつきながらそろそろと移動し、居間から出る。

中庭に入ると、今度は朱王の声も耳へと届いてきた。

「どうしてあなたが、ここに？」

「やはりいたか、朱王。……それに、翡燕も」

(……っ、どうして……)」

翡燕は一步踏み出そうとして、その場でたたらを踏んだ。そしてふらついたところを逞しい腕に支えられる。

「危ないやないか……！」

朱王は翡燕を引き寄せ、胸に抱きこんだ。衣の袖を上手く使って翡燕の顔を覆い隠し、囁き声で翡燕を叱る。

「翡燕、出たらあかんて言うたやる。…… 弑王様や」

(……うん、分かってる」

見えなくとも、翡燕には声だけで分かる。来訪者は間違いなく弑王だ。かつて翡燕に乱暴を働き、追い詰めた男である。

弑王と再会した時、翡燕は自身でも驚くほどに動揺してしまった。

それを目撃している朱王にとっては、弑王は皇子以上に警戒すべき相手なのだろう。朱王から発せられる警戒心が次第に殺気を伴ったものになっていく。

それに気付いたのか、弑王は低い声色で言い放った。

「……どうやら朱王は、翡燕と私の過去を知っているようだね。しかし今は、どうか翡燕の身体を最優先に考えてくれないか？」

「身体……？」

「ああ。……遠目からでいい、翡燕の状態を見せてくれないか？ 先ほどちらりと見えたが、包帯を巻いているだろう？ どうしたのか教えてもらえないか？」

(……っ、あなたには、関係ないやろうが……！)」

矢継ぎ早に問う弑王に、朱王は更に殺気を滾らせた。抱き込まれているせいか彼の荒ぶる鼓動が伝わってくる。

翡燕は朱王の背中を宥めるように撫で、弑王に向けてきっぱりと言う。

「帰ってください」

「…… 翡燕、顔を見せてくれないか？」

「嫌です」

「……先ほどから気付いていたが、この屋敷には生薬の匂いが漂っているね。匂いからして解毒薬だろう。その目は外傷ではなく毒のせいだな？ …… 朱王、違うか？」

「……っ」

朱王が驚いたように息を詰める。

式王はウウラ一の医者だ。状況だけで翡燕の症状を言い当てたことで、朱王はその実力を再認識したのである。

翡燕の目の治りが悪いことは朱王も把握している。もしも打開策があるなら藁にも縋りたいのは彼も同じだ。

そんな気持ちからか、朱王が発していた殺気が僅かに鎮まり始めた。

「朱王、そのまま翡燕を抱きしめたままでも構わない。診せてくれないかい？ 私には彼の目を治すことができる。翡燕には一切触れないと誓う」

「……ほんまに、治せますか？」

「ああ。最善を尽くす」

朱王の髪がさらりと翡燕の頬に触れる。

こちらを見つめているであろう彼は、優しく翡燕の髪を撫でた。

「……翡燕、診てもらい？」

「……」

翡燕は朱王の胸元を握りしめ、式王がいる方を包帯越しに睨んだ。

(……先に蘇芳を懐柔するなんて……まったくこの人は……)

かつて式王と翡燕は仲のいい兄弟のような関わりをしていた。そのため彼は、翡燕の性質をよく

把握している。

頑固な翡燕を落とすよりも、朱王を言いくるめる方が簡単だと判断したのである。そして朱王に頼まれれば、翡燕は断り切れないということも式王はお見通しなのだ。

医術以外は優柔不断で抜けている式王だが、こんな時に限って上手く対処してしまう。

今はそれが殊更に憎たらしい。

翡燕は怒りを込めて溜息を吐くと、包帯に手を掛けてくるくと解いた。そして尖った口のまま、拗ねたように「どうぞ」と言葉を放る。

式王が歩を進める心配がして、彼に染み付いた薬草の香りがふんわりと鼻に届く。

「……朱王、臉を捲つてくれ。……翡燕、痛みは？」

「ありません」

「そうか……痛いか。痛みがあるのはよくないな。毒の名前は？」

「……っ！ 痛くないって言って……!」

「自分の身体のことになると、お前はいつも天邪鬼だからな。……ちよっと近づくと」

朱王から守るように抱きしめられ、薬草の香りが強くなる。

かなり近から観察されているような心配がするが、やはり触れてくる心配はなかった。すんすんと匂いを嗅ぐ音のあと、式王が驚きの声を上げる。

「これは……泉丸か！」

「……!? ……まさか、匂いで分かったんですか？」

「ああ。しかもこの泉丸は、皇家に伝わる毒の方だな」

「……っ！」

翡翠は驚愕し、思わず声のした方を見遣った。

(……信じられない。相変わらず……医療については随一だな……)

泉丸が二種類ある事実を、弑王が知っていることについては驚かない。

問題は匂いだけでどちらかを言い当てたことだ。

翡翠が毒を受けたのは数日前だ。症状は残っていても、毒の成分は体内で多少は分解されているはずである。この状態でどちらの泉丸か言い当てることなど、翡翠でも無理だ。

弑王の医療の知識と理解度は常人を超えている。

朱王から完全に殺気が消え、憂いと期待が籠った声の上から聞こえてきた。

「何か違いがあるんですか？ 毒を受けたその日から、俺の侍医から処方された泉丸の解毒薬を使っているんですが……なかなかよくならんのです」

「一般に知られている泉丸と、皇家が使うものは調合法が違う。それを示した書は皇宮にしかなく、門外不出だ。解毒薬はそれを元に作らなければならぬだろう。……しかし翡翠、このことはお前も知っていたのではないか？ 書を読んだだろう」

「……！」

朱王が息を吞んで、こちらを見下ろす気配がする。

しかし翡翠は顔を上げないまま、目の前に広がる真つ暗闇を見据え続けた。

できれば知られたくはなかった。解毒薬が皇宮でしか調合できないとなれば、朱王や黒王は迷わず皇宮の薬師室へ向かうだろう。

しかし皇宮の薬師や医師たちの多くは皇子派で有名だ。病弱な皇子のために各地から集められているため、皇子と治療院の関わりは昔から深い。

四天王が泉丸の解毒薬を求めたとすれば、必ず皇子の耳に入るだろう。

恐らく皇子は、まだ翡翠を戦司帝だと完全には確信していない。こちら側が皇宮に薬を求めれば、答えをやるようなものになってしまう。

黙り込んでいると弑王が更に言葉を続けた。

「翡翠、どうして隠した？」

「……処方された解毒薬でも時間を掛ければ治ります」

「それでは身体に負担が掛かるだろう？ どうして四天王に頼らない？ 彼らなら上手くやってくれるだろうに」

「……」

確かに今なら白王や青王の助けも借りられる。

彼らならば皇子に悟られないまま解毒薬を作り、持ち出してくれるかもしれない。

しかしこの泉丸という毒は、翡翠にとって黒い因縁そのものだ。

四天王はもちろん、弑王にもあまり関わってほしくない。

「身体がもう少し回復すれば、僕が調合するつもりでした。……わざわざ皇宮に行かずとも……」

「翡翠、本当にどうしたんだ？ ……どうしてそんなに皇宮を避ける？」

「……避けている訳ではありません。今更、顔を出せないだけです」

翡翠は俯うつむいてふるふると頭を振った。今となつては皇宮に帰るところか、近寄りたくもない。確かに帰ってきた当初は、翡翠も一度は皇宮に戻ろうと思つた。

しかしその想いは日に日に小さくなり、今では恐怖すら覚える。

そんな翡翠を叱るように、弑王が声を上げる。

「何を言っているんだ……！ お前が帰ってきたと知れば、どれだけ陛下がお喜びになるか！ 陛下はお前を、本当の子どものように可愛がっていただろう？」

「……ええ、そうです。……捨て子の僕を、皇家の人々は受け入れてくれた。陛下にも可愛がってもらいました」

「だったらどうして？ あそこはお前の家だろう？」

「……っ、ええ、そう、です……。……だ、だけど……。……だけ、ど……。……」

きゅつと喉が詰まり、肩が強張こばる。

その様子に気付いた朱王が慌てて背中を摩こつてくれる。その温かさに少しだけ救われた。

しかし依然喉は強張つたままで、続く言葉が出てこない。

握りしめた拳が震え始めたところで、ふわりと身体が浮く。そして優しく抱きしめられた。

「翡翠、もうええよ。……弑王様、帰ってください」

「…………分かった、ここは引くでしょう。……しかし私は、今から皇宮へ行つて解毒薬を調査す

るつもりだ。構わないな？」

「……っ、いいえ！ おやめください！」

「翡翠、お前は一体何を恐れているんだ？ その子が今、どんな顔をしているのか想像できないのかい？」

「……」

弑王の言う『その子』とは朱王を指しているのだろう。

都を長く離れていた弑王にとつて、朱王はいまだ戦司帝の弟子である印象が強い。そして翡翠がどれだけ四天王を大事に思っているのかも、弑王はよく知つていたのだ。

翡翠は朱王の胸元を掴んで、少しだけ顔を上げた。視界は真つ暗で何も見えないが、朱王が浮かべている表情は分かる気がする。

困惑、心配、焦り、皇家に対する不信感も高まっているだろう。

いろんな感情が渦巻いているだろうに、朱王はそれを翡翠のために押し殺しているのだ。途端に胸が苦しくなり、翡翠は俯うつむく。

「……はい……。……」

「彼らのため、何を差し置いても早く治さなければ。……そうだろうか？」

「……」

「私を止めても無駄だ。好きに動かせてもらう。……誰に毒を盛られたのかも探るが、いいな？ どうせお前は教えてくれないだろうから」

弑王は自嘲的な響きを含んだ声をぼつりと零した。途端、翡燕の心は虚しくなり、凍てついていく。

翡燕は幼い時、弑王を敬愛していた。

こんな関係になるなど、あの頃の翡燕は想像もしていなかっただろう。

翡燕とて、どうしようもなくなってしまった今の関係を悲観しない訳がない。元の関係に戻ろうと、画策していた時期もあった。

結果的に力及ばず、こうして弑王は過去の罪に囚われ続けている。

「……なあ、翡燕。……私はどんなにお前に疎まれたとしても構わない。……もう既に、お前にとつての私の信用は地に落ちていいるだろうから……」

「……罪滅ぼしのためなら……迷惑です。僕のことには放っておいてください」

「罪滅ぼし？ この罪が晴れることなど、天地がひっくり返ってもあり得ない。一生背負うと決めただ罪だ」

弑王はあつさりと言い放ち、一つ息を吐いた。

そして小さく空気が動き、とん、と小さな振動が朱王の身体越しに翡燕へと伝わる。

「とはいえ、朱王。……お前がうらやましいよ。私もそちら側に立ちたかった」

「慣れ慣れしゅう、せんでもらえます？」

「お前の肩を叩くぐらい、よいだろう？ 翡燕には触れられないんだから。……思えばこれが、私に課せられた一番の罰なのかもなあ」

弑王の鷹揚な笑い声が聞こえ、今度はぼしばしと豪快な振動が伝わってきた。そして空気が大きく動き、弑王が離れていく気配がする。

最後に彼は、置き土産のような言葉を残していった。

「……翡燕、帰ってきてくれて……本当によかった」

「……」

「……本当に、そうだろうか……」

屋敷の扉が閉まる音を聞いて、翡燕は溜まっていた息を吐き出した。

皇宮にいたあの頃、翡燕は『戦司帝』という役割を演じ続けていた。

数万年演じ続けたせいですっかり板につき、それが自分の素なのではないかと思うほどに。

それが今や、こんな姿になってしまった。あの頃の努力は無に帰して、状況は更に悪い。

朱王に抱きしめられながら、翡燕は先の見えない状況に心を揺らす。

そんな翡燕の顔を、朱王がじつと見据えているとは気付かずに。

* * *

皇宮の秘書官長室で、青王はいつものように管を巻く。そろそろ夕餉だという頃、予想外の人物が訪ねてきた。

薄く微笑みながら立つ皇王に、青王は跪くのも忘れていた。ばかりと開いた口からは情けない声

が転がり出る。

「へ、陛下……？」

「青王。すまないが、ここを貸してくれ」

ユウラの王である皇王はかつて濡羽色の美しい黒髪が有名だった。それが今は白髪も混じり、灰色になっている。

しかし眉目秀麗な容姿はさほど衰えておらず、十万歳をゆうに超えてなお、美しさは健在だった。この場所に皇王が来ることは滅多にない。

それ以上に、護衛を引き連れていることに青王は驚いた。

ただならぬ雰囲気を感じたのかナギが人払いをし、自身も退室する。

するとそれに入れ替わるようにしてまた誰かが入ってきた。

青王がひくりと頬を引きつらせる。

「……つに、弐王様……？」

「久しぶりだな、青王」

「これは……一体……」

いつもは砕けた雰囲気である秘書官長室が、一気に緊張感で張り詰める。

皇王と弐王の仲の悪さはユウラの中では有名な話だ。

まだ王座が定まって間もない頃に関係が悪化したと聞いているが、青王にはそんなこと正直どうでもよかった。詳しく知りたいとも思わない。

それよりも、険悪な場となりそうなここから早く抜け出したかった。

面倒ごとは知らぬふりを通すのが一番だ。

しかし拱手して退出しようとするところを、皇王からやんわりと引き止められる。

「青王、座ってくれ。弐王もそこへ」

「はい」

「……………」

かつてナギと抱き合っていた寝椅子に、皇王がゆったりと座り込んだ。弐王はその向かいにあるひじ掛け椅子に腰かけ、神妙な面持ちを皇王へと向ける。

居たたまれなくなった青王はナギの執務机から椅子を拝借し、少し離れた場所へと座る。そして心の中で毒づいた。

(………つたく、何なんだ？ 内密の話なら、ぼく抜きでやってくれよ……)

青王は昔から皇家が苦手だった。理由はほかでもない、戦司帝に対する距離が近かったからだ。

皇王の戦司帝への態度はまさに溺愛で、親子の範疇を超えているのではないかいつも疑っていたものだ。

しかしその皇王でもまだましな方で、それ以上に許せなかったのは、彼の息子である第一皇子だ。皇子はまるで『自分は戦司帝の特別』だと言わんばかりの態度で、いつも戦司帝に付き纏っていた。

仲のよさをわざとらしく見せつけてきて、常に優位性を示す態度が腹立たしかったのは今でも鮮

明に覚えている。
そんな憎たらしい皇子に対しても四天王が友好的に接していたのは、戦司帝が彼を大事にしていたからにはほかならない。

愛している人が弟のように接する相手を、嫉妬心で冷たくできる訳もなかった。

(……っ、だけどさ……! 翡翠の可愛いお目を傷つけたの、あの馬鹿皇子だっというじゃん! ふざけるなよ! ……ぼくがどれだけ、戦を待っていたか……!)

愛しい人との再会は、喜びばかりではなかった。

かつての凛々しい姿は変わり果てていた。それは別に構わない。容姿がどうであろうと、戦司帝への愛が変わることはないからだ。

しかし再会をした時の彼の状況は、とても許容できなかった。

目に包帯を巻き、寝台の上に座る彼を見た時、再会の喜びよりも怒りが勝った。

皇子に殺意を抱いたの言うまでもない。積年の苛々を封じ込めていた『皇子は戦司帝の味方であり無害』という抑止力を、皇子自らぶち壊したのだから。

そんな男の父親が今、目の前に座っている。

青王にとっては、もはや敵と言っても過言ではない。

黒々とした感情を隠さないと、二人はまるで青王などいないかのように、会話を始めた。

「久しぶりだね、弑王。いや、莊宗。……元気にしていたかい? なんて、聞いている場合ではないか。……その様子じゃ、何人かの高官に声を掛けられたのだろうか?」

「ええ。……まさかいまだ燻っていたとは。次期王座は、殿下が座ることで間違いはないでしょうに」

「それを遅らせているのは私で、各地で弑王を推す声が大きくなっている。……お前はしばらく、西には戻れまい」

「……え、それ、ここでする話ですか……!?!」

青王は思わず声を荒らげて、二人を交互に見遣った。

王位継承の話わざわざここに来てする意図が分からない。そしてこの場に青王が同席しなければならぬ理由も。

しかし皇王は先ほどと同じ態度のまま、穏やかに青王を見据えていた。

「まあ、聞きなさい。お前たちの師匠に關係がある話だ」

「……え……?」

「どうしてですか?」

弑王も皇王の言葉が意外だったのか、腰を浮かせるようにして問う。

皇王は指を組んで、青王と弑王を交互に見据えた。

「莊宗を都へ呼び戻すべき、という意見はずっと前からあったが、それを誰よりも否定してきたのは皇妃だ。お前が起こした過去の一件を許せないからだと言ってな。……しかし戦司帝がいなくなり、再び弑王派が活性化している。もう抑えられない程にな」